

最後にPMD児（特に車椅子移行期）の心境を考え、次のような目的のもとに全職員が協力して援助にあたっている。

- ① 看護者は患児の心理的移行をもよく理解し、疾病の進行度に応じたそれぞれの児童に最も適した環境をつくる。
- ② 歩行訓練や機能訓練を強行することにより不安定な精神状態に落ちこませないように配慮し、精神的安定を保つ。

②) 電動式椅子便器の改良

国立療養所西多賀病院

佐藤義隆 伊東悦子
千田武昭 菊地伊三郎
川村とよ子

<はじめに>

当院におけるPMD者の病床数は160床あり、収容患者も満5才から63才と幅広く、重度の患者が多い。その為看護業務の内容及び看護力の過重等、深く問われているのが現状です。業務内容も殆んどが生活援助であり、その中でも排泄に関する援助は、看護力の大半を要する大きな問題と言っても過言ではありません。使用する患者にとって、又、そのケアにたずさわる介助者にとっても、より安楽にかつ援助しやすいものであれば、患者にとっては安易に介助を依頼することが出来又、とりわけ腰痛予防につながると考えます。そうした点で、患者一人一人の体位と、排泄についての個人的習慣などを考慮し、それに適合できる椅子式便器を製作、使用してみた。

<目的>

1. 患者が安心して使用できる事。
2. 拘縮が強度で、筋力低下した患者や、体重のある患者でも、苦痛なく使用出来る事。
3. 介助者の作業能率の向上と、腰痛予防に適する事。

<経過>

手動式では、

1. 体重のある患者には活用しにくい。
2. 患者が望む体位の固定が不充分である。
3. 介助者の労働の負担が大きい。

電動式では、

1. 体重のある患者、変形の少ない患者は、180度リクライニングさせ、ベッドからの移動が容易にできる。

2. 変形のいちじるしい患者の使用に適し、患者が自分で体位調整ができる。
3. 使用中にある殿部の圧迫を、リクライニングすることで和らげる。
4. リクライニング操作が連続的にスムーズに行うことができる。
5. 介助者の労働の負担が軽く、腰痛がある程度予防できる。

以上から図面作成にとりかかり検討を加えた。既製の電動車椅子を改良すべく企画して話し合いある製作所の協力を得ることができました。実際に使用してみた結果、変形、障害度の違いに伴ない、体位や使用方法が個々の変形、障害度によって異なるのは、当然としても、現在使用している手動式椅子便器よりは、苦痛が少なく安定感も増し、自分で操作できるということで、使いやすいという結論に達しました。

<利 点>

1. 自分の希望する体位が得られる。
2. 操作しやすく、又、使いやすい。
3. 安定感がある。
4. ベッドより移動が容易である。
5. 介助者の腰部負担を少なく腰痛予防できる。
6. コントロールボックスの移動が可能で、どんな姿勢でも手で触れただけで操作できる。
7. 障害度や変形等異なり便座は3つに別けた。
8. 排便時以外に、安楽椅子にも使用できる。

<欠 点>

1. コントロールボックスは重量がある為、自分で維持不可能な患者もいる。
2. トイレにて使用可能ではあるが、特に狭い場所では、リクライニングすることで使用できない為、他の場所を必要とする。
3. リクライニングした場合、便器車にさし込み式を取り入れたが、殿部と便そうの間隔がせまく殿部が汚染される可能性がある。
4. 電動車兼用も考えたが、構造上困難があり、便器車専用とせざるを得なかった。

等の欠点はありますが、今後これを安楽に、又、容易に使用できるものへと改良して行きたいと思いますが、一応作成の過程と使用の状況を、ここに発表させていただきました。

 **検索用テキスト** OCR(光学的文字認識)ソフト使用 
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

<はじめに>

当院における PMD 者の病床数は 160 床あり、収容患者も満 5 才から 63 才と幅広く、重度の患者が多い。その為看護業務の内容及び看護力の過重等、深く問われているのが現状です。業務内容も殆んどが生活援助であり、その中でも排泄に関する援助は、看護力の大半を要する大きな問題と言っても過言ではありません。使用する患者にとって、又、そのケアにたずさわる介助者にとっても、より安楽にかつ援助しやすいものであれば、患者にとっては安易に介助を依頼することが出来又、とりわけ腰痛予防につながると考えます。